

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

無料

第 48 号

特集
コロナ禍で考える

スポーツくじ

toto
FOR ALL SPORTS OF JAPAN

BIG

スポーツ振興くじ助成事業

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2	第48号を発刊するにあたり	長田 渚左
	■特集■	
	コロナ禍で考える	
4	嘉納治五郎だったら 東京2020大会をどうするか —— 真田 久	江川 卓美 ^{構成}
16	今こそ、オリンピックの未来のために —— 刈屋 富士雄	阿部 雄輔 ^{構成}
29	コロナ禍での心の中をみつめる —— きたやまおさむ氏に聞く	長田 渚左 ^{構成}
37	アメリカの現状 —— 八田 忠朗氏に聞く	長田 渚左 ^{取材・構成}
41	2020年 東京オリ・パラは、既に目的を達成した!?	玉木 正之
47	夢劇場『馬』No.21「遊園地のスリル」	長田 渚左
48	バックナンバーのご案内	

【表紙イラスト】南 伸坊

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第48号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



皆様、いかがお過ごしでしょうか。

新型コロナウイルスは世界中に蔓延し、今も予断を許さない状況が続いています。

オリンピック・パラリンピック東京大会も1年延期されたとはいえ、厳しい状況に変わりありません。追加経費は数千億円といわれ、ウイルスは依然として世界に拡大しており、開幕までに収束する保証もありません。世論調査でも「来年の開催は無理だろう」という意見が多数派です。

私も「開催してほしい」と願う半面「現実的には難しいのでは」とも考えてしまいます。先の見えな
い中、コロナ禍で開催される東京大会をどうやって迎えればいいのか。そこで今回の48号では、過去、現在、未来を考察しながら話をしていただける方々

に登場していただきました。

筑波大の真田久教授のテーマは『もし嘉納治五郎が今の時代に生きていたら、どうするか』。元NHKアナウンサーの刈屋富士雄氏には、16回のオリンピック報道に携わった経験をもとに、オリンピック開催の真の意義について語っていただきました。東京大会の開催に否定的な意見が多い中だからこそ、一人一人に考えていただきたいと思います。

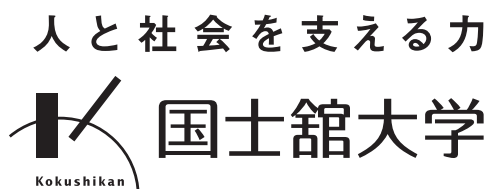
現在の非常事態を踏まえて、2人のお話は日本スポーツ学会のホームページの『スター・セミナー』と題した動画でも配信しています。この配信動画は誰でも無料で視聴いただけるようにいたしました。

テニスの大坂なおみ選手が、優勝した全米オープンで人種差別に抗議するために黒いマスクを付けて世界の注目を浴びました。多くの人が差別問題について考えるきっかけになりました。今の時代、オリンピックの真の姿とはどうあるべきか。スポーツゴジラで、未来のために考えていただければ幸いです。

ご協賛およびご協力企業・団体



株式会社 御福餅本家



上月財団

立ちどまらない保険。



MS&AD

三井住友海上

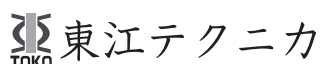


公益財団法人
住友生命健康財団



株式会社東美物流

日本ハンドボールリーグ機構



(順不同)



コロナ禍で考える

嘉納治五郎だったら 東京2020大会をどうするか

—— 真田 久

構成 江川卓美

写真提供 (公財) 講道館

古代オリンピックは今から約2800年前の紀元前776年に始まったと言われている。その始まりの理由を“頻発する戦争を回避したい人々の願いが生んだ”と思っている人が今も多い。しかし実は戦争のみならず、疫病も多発した時代であったという。

戦争と疫病に疲弊しながら、人々はオリンピックを誕生させ、そこに何を託し、何を見出したのか?! コロナ禍で世界中が苦しむ今、東京2020大会を改めて考える……。



真田 久 (さなだ・ひさし) 1955年12月24日、東京都出身。81年筑波大学大学院体育研究科修了。博士(人間科学)。現在は筑波大体育系教授(スポーツ人類学)。専門はスポーツや五輪に関する歴史人類学研究。日本スポーツ人類学会会長、日本オリンピック・アカデミー副会長、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会参与。主な著書に「19世紀のオリンピア競技祭」(明和出版)、「嘉納治五郎 日本にオリンピックを呼んだ国際人」(潮文庫)などがある。

東京2020大会の延期に伴い、私の専門であるオリンピックの歴史、人類学的な視点で、もしも嘉納治五郎が今いたら、どういうふうに言うだろうか、私見を述べさせていただきます。

最初に大会の延期についてですが、今年の3月24日に日本側とIOC（国際オリンピック委員会）のトーマス・バッハ会長とで話し合い、延期が決定しました。そして、来年の7月23日に東京2020大会として、オリンピックの開会式を行うことになりました。その時の両者の思いは、新型コロナウイルスの世界的な蔓延、これを克服し、完全な形で開催をしたいということでした。それからIOC会長は、4月下旬に世界に向けて「オリンピック・izm・アンド・コロナ」というタイトルのメッセージを、公式サイトで公開しました（*1）。

「オリンピックが延期になるということは、これまでのオリンピック史上なかった初めてのことである。それに対して、連帯、創造性、決意、柔軟性が必要

で、IOCとしては、『Here We Go』というタスクフォースを作り上げて、これを基にして、安全な環境、そしてコストをなるべく削減していく。さらにはWHO（世界保健機関）とも連携をしていく。それらを基にして、明年開かれる東京2020大会を人類統合の祭典にしたい。その時に灯される聖火は人類の暗闇を照らす希望の光になるであろう」

大会延期と課題

延期による課題として主なものを挙げますと、大会の参加者、選手はもちろん観客、ボランティアや様々な関係者の人達に対して、新型コロナウイルスから安全をどう確保するか、健康をどのように保障していくかということがあります。また、延期に伴う経費がかさんでいくので、これをどのように、誰が負担するのか。さらに、会場が1年後も同じように確保できるのだろうか。幸い、競技会場について

は、ほぼ全てが同じ会場を使うことで進んでいます。それ以外にも、500くらいの全国の自治体と各国の選手団、関係者が交流を行っている。それらホストタウン交流が、新型コロナウイルスによって途絶えてしまっているという課題もあります。

さらにスポンサーです。1年延期になったことで、スポンサーとの契約も考えなければいけません。また、選手村をきちんと確保できるだろうか。特に、その後に使用されるマンションとの関係で課題が出てきています。

しかし、幸いにも東京2020大会の聖火はギリシャから日本に到着しています。大会に向けての最大限の要素、重要な要素である聖火が既に日本に来ていることは、大きなメリットであると思います。

古代オリンピックと、その起源

私は、大学院生時代に古代オリンピックの研究をしており、当時からいろいろな文献を読んできました

た。古代オリンピックの起源について読んでみると、今に通じるような問題が見えてきました。古代オリンピックは、紀元前の776年(約2800年前)にエリスという都市国家にあるオリンピアで競走が行われ、それ以降、格闘技、投擲、跳躍、競馬、戦車競走、さらには音楽競技も行われました。歴史上、紀元後の393年まで行われているのが確認されています。この間、1200年にわたって古代オリンピックがオリンピアの地で行われていました。今日の近代オリンピックがおよそ120年ですから、古代は大体10倍の期間行われていたということになります。音楽の競技では、笛を吹き、人が声を出して人の声や笛の音がどこまで遠くにきれいに届くかを競うことが行われていました。

練習場は、ギムナシオン(体育館の語源でもある)と言います。裸で競技の練習を行っていました。また、有名なやり投げのアスリートの彫刻があるのですが、非常に美しい身体が作り上げられていて、知的な雰

囲気があり品格も漂っています。これは、カロカガティアと言い、古代ギリシャの理想的な人間像でした。練習場の横では、フルートを吹いたり、トレーナーらしき人が見ていたり、さらには芸術家たちが集まって選手の様子を描くというようなことも行われていました。まさに、スポーツ、芸術そして競技というものが育まれていった、それが古代オリンピックの特徴なのです。

オリンピックの起源については、紀元後2世紀にギリシャを歩き回って克明に様々な物語、歴史的な建造物などを記したパウサニアスという人物の記録『ギリシャ案内記』があります。その中に、オリンピックでなぜオリンピックが始まったのかということが書いてあります。そこには、「疫病」と「内戦」と書かれています。疫病と戦争がギリシャに広まっていたことによつて、古代のオリンピックが始まったということが書かれているのです。ギリシャ内部が疫病と戦争で疲弊していたので、都市国家のひとつ

つであるエリスの王・イフィトスが、デルフォイの神に、これらの災いから逃れる術を尋ねたところ、オリンピックで競技祭を開催するように告げられた。つまり、疫病と戦争を回避したい、疫病と戦争から社会を復興させたい。そういう思いで始められたのが古代のオリンピックの起源ということになります。これによつて1200年間もの長きにわたつて、古代のオリンピックが行われるようになったのです。

分断から連帯へ

古代オリンピックの起源という視点から東京2020大会を考えてみるには、最初にオリンピックズムの根本原則を確認しておくことが大事だと思います。昨今の新型コロナウイルスは、人と人とをまさに分断していると言つてもいい。国と国とも分断し、国の中の地域も分断している。さらには、人権というもの、まさに今、ズタズタにされようとしているのではないのでしょうか。アメリカでは人種的な差別と

いうものも露わになっていきますし、またコロナの感染で陽性反応が出ただけで、いろんな非難を受けるという、まさに分断をもたらしているということが言えると思います。

それに対して、オリンピックは、人と人との連帯というものをその価値の中に持っていますし、そのことを今回最大限に示していくべきだろうと思います。また、もともと東京2020大会で言われていた多様性と調和。様々な人々がいてお互いの人権等の価値を認めて支え合って生きていく。このような様々な価値が、新型コロナウイルスによって壊されている。これらを回復していくという意味で、非常に重要なものを東京2020大会は内在していると思います。さらに、古代オリンピックの原点から考えてみると、疫病と戦争からの復興であるというオリンピックの原点に突き付けられていた問題が、東京2020大会にも示されていると思います。このような問題を、やはりこの大会で解決していかなく

てはいけないのではないかと、立ち向かわなければいけないのではないかと思います。かつて『ギリシャ案内記』に戦争や内戦と書かれていた部分には、国家間の関係が重なります。今やアメリカと中国、朝鮮半島もそうですし、日本と中国、あるいは日本と韓国の関係も非常に危うい状況にあるのではないかと思います。疫病がきっかけで、争い事が悪化することもあるわけですし、そのようなことに対処して克服していくという考えは大事なんだろうと思います。

スポーツと復興の関係

そして復興。もともと東京2020大会の開催目的には、復興の理念が含まれていました。2011年3・11の東日本大震災からの復興という意味合いだったのですが、WHOがパンデミック宣言を出したその日が、まさに今年の3月11日でした。東日本大震災の日が、パンデミックの日と重なりました。

ということは、東京2020大会は日本の災害からの復興だけではなくて、世界の新型コロナウイルスからの復興という両方の意味を併せ持った大会であると言えると思います。これがまさにオリンピックの原点を突き付けられているということなのです。

この復興について、IOCバツハ会長がかつて筑波大学で講演した際に、「新しいスポーツの価値を示す」、「オリンピックムーブメントの新しい価値になる」と言われました。しかし、日本は過去の東京大会においても、復興の理念はずっと掲げられていました。

まず、1940（昭和15）年の東京大会。幻になりましたが、この時は、関東大震災からの復興というところが、東京市長の招致文の中に含まれています。それを指導したのが、嘉納治五郎です。1923（大正12）年に関東大震災が起きますが、その後、嘉納治五郎はスポーツを通じた復興を手掛けました。9月に大震災が起こり、11月には陸上競技の日本選

手権を東京で行いました。スポーツを通して日本人を元気づけようという視点で行い、翌年のパリオリンピックへの参加も直ちに決めます。「こういう時だからこそ、これまで積み重ねてきたオリンピックへの実績というものをここで絶やしてはいけない」ということで、最小限の人数で24（大正13）年のパリ大会へも臨みます。さらに、当時の日本政府は、3つの大きな公園（隅田公園、錦糸公園、浜町公園）を作ることを決定します。下町で大災害、火災が起こり10万人もの死者が出たために、大きな公園を作つていざという時に避難できる場所にしようと政府は決めて、当時の帝都復興院総裁・後藤新平がそれを推進します。その時に嘉納治五郎は、「どうせ作るのであれば、公園にスポーツ施設を作るべきである。そうすれば、平時にはスポーツを行って健康になることができる、いざという時にはそこが避難場所にもなる」と提案をします。これが日本で初めてのスポーツ公園となり、一般の人々が気兼ねなくス

ポーツができるようになる第一歩となりました。

3つの公園にはすべてスポーツ施設ができました。テニスコート、児童公園、それから広いスペースやプールが作られました。隅田公園は隅田川の両側に広い公園になっていますし、錦糸公園は錦糸町駅に隣接した場所に広い公園があります。浜町公園のプールは、婦人用の時間帯を設けて、女性たちが存分に人目を気にせず泳げるように配慮されました。1938（昭和13）年、嘉納治五郎は残念ながら死去し、40年大会も中止となりますが、彼によつてスポーツを介して、復興というものがなされた事例と言えるでしょう。

1964（昭和39）年東京大会は、第二次世界大戦からの復興という意味を大きく持っていました。特に東京大空襲や広島と長崎の原爆などで国土が焼け野原になりました。その19年後にオリンピックという平和の祭典を開催します。開会式の聖火最終ランナーは、広島に原爆が投下されたその日、広島県

で生まれた坂井義則さんでした。まさに第二次世界大戦からの復興という意味を持っていました。

そして、この2020年。東日本大震災からの復興、そしてパンデミック、疫病からの復興というところで、東京大会は復興とずっと関わっていた、オリンピックの原点というものを必然的に持っていたということが言えるのです。ですから、やはり2020年、パンデミックが起こったことを理由に、「東京大会ができなかった」ということにするわけにはいかなないと考えています。

災いを転じて福とせよ

隅田公園には広い遊歩道が作られています。大正時代、隅田川は、ボートレースのメッカであり、専門学校、大学、高校生の大会が行われていました。その横を歩きながら、あるいはジョギングしながらそれを見ることができるよう遊歩道が作られたのです。さらに、プールには夜間照明がつけられまし

精力善用・自他共栄

「己の生活を立てる途を考え、それに差し支えがなければ、自己発展のためと同時に他の個人のため、社会のため、国家のため、人類のため、即ち一言にていえば他のために何をどうするがよいかということ考慮し、その最善と信ずることを遂行せよ」

た。労働者が多い地域でしたので、多少夜が遅くなっても泳げるように配慮されたのです。野球場では、区役所同士の対抗戦や役者とか俳優たちの野球大会などが行われており、市民スポーツが盛んになっていった様子がわかります。

錦糸公園は、錦糸町駅のすぐ脇にある公園で、人々が自由に散策し、いろいろな運動ができます。

ここにも、プールが作られました。その他、児童公園、テニスコート、野球場を作りました。嘉納治五郎は、「災いを転じて福とせよ」というエッセイ（『柔道』第二巻第九号、1923年）を、大震災が起こった直後に書

いていて、3つの公園の造営はまさにその表れだろうと思います。

さらに私は昨年のNHKの大河ドラマ『いだてん』の歴史考証に携わっていたのですが、その中で罹災者運動会りさいの写真を発見することができました。

関東大震災からわずか2カ月後、上野公園で罹災者による運動会が行われました。大勢の人が集まって、交流を楽しんだという記録が残っています。これはまさに、スポーツによる復興の先駆けでした。当時の嘉納治五郎は、先ほど紹介しましたエッセイの中で、今こそ嘉納の哲学である「精力善用・自他共栄」を実践するべきであると言っています。この中で、「己の生活を立てる途を考え、それに差し支えがなければ」という箇所は、非常に嘉納治五郎らしい点であり、滅私奉公ではない、自分自身のある程度余裕がでたならば、ということを述べています。社会のため、国家のためだけでなく、「人類のため」が入っているのも嘉納治五郎らしい言葉であり、今

日のようなパンデミックが起こった時だからこそ考えていくべきことだと思います。自分のことだけ、あるいは自分の国のことだけではなくて、何ができるかを考えてそれを実践していく。こういう嘉納治五郎の考えを、今回東京2020大会を通して広めていくべきだろうと思います。

第700回の暗示とは

オリンピックアードという言葉について説明します。紀元前776年より、4年を一つの単位としました。これを、1オリンピックアードと言います。そして1年目に大会を開催するという決まりが古代から出ていました。このことは近代でも受け継がれており、近代では、1896（明治29）年が第1回オリンピックアードであり、現在は、近代の第32回のオリンピックアードになります。

このオリンピックアードが、いつからいつまでかと言いますと、2020年の1月1日から2023年の

オリンピックアード

紀元前776年より
4年を1オリンピックアード
1年目に大会を開催
393年:第293回オリンピックアード
近代第32回オリンピックアード;
2020.1.1~2023.12.31
2021年:第700回オリンピックアード

ピック最後の大会（紀元後393年）は第293回オリンピックアードになります。そして、そこから数えて東京2020大会が行われる2021年は、古代でいうと何と第700回オリンピックアードの始まりの年に当たります。これはオリンピックの歴史から考えて、新しい時代が始まるということを暗示しているのだらうと思います。

年末までになります。要するに、我々はこのオリンピックアードが責任範囲ということになります。大会が終わればそれで終わりではないというところが、オリンピックアードの考えなのです。古代に遡って考えますと、古代オリ

連帯と原点

2020年以降の形も考えていく必要があります。アフターコロナと言われますが、これを契機に規模を縮小したほうが良いのではないか、持ち回り開催は本当に継続可能なのか。分散体制、あるいは古代オリンピックのように、恒久的な場所を考えていいのかもありません。また、スポーツイベントの形を、世界選手権とオリンピック・パラリンピックを統合するということを考えてもいいのではないだろうか。eスポーツ、あるいはリモート競技を模索していく。さらには開催時期の変更。この夏の暑い時に行わなければいけないと決められたのは、割と最近なのです。64年大会は秋に行っていますし、シドニーオリンピックも9月に行っております。もつと、そこに余裕、幅を持たせてもいいのではないだろうか。今回の延期を機に他の世界選手権との連携も図れるかもしれません。いろいろなことを、これを契機に考

えていくべきだと思います。これはまさに第700回オリンピックアードに当たる、私たち日本から発信していくべきではないでしょうか。

日本ではそのためのテクノロジーである『科学技術イノベーション』というものが考えられてきました。感染症のサーベイランスの強化というものも既に行われていますし、社会参加のシステムも考えられています。それから新・臨場体験映像システムも、官民挙げて政府指導で作られています。その一部を紹介しますと、すぐ目の前で競っているかのような臨場感のある擬似3D表示を、離れていても見ることができます。このような技術を使えば、たとえば観客が十分入れなくても、また無観客であっても、離れたところにおいても十分映像で競技を楽しむことができるシステムが作られつつあります。

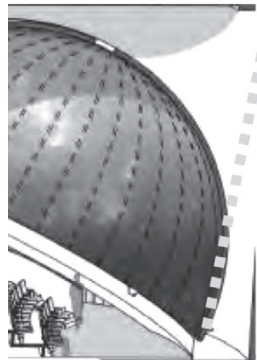
2月17日に、『United by Emotion』という東京2020大会のモットーが発表されました。このモットーには様々な環境、喜怒哀楽を

含めて、感動によってみんなが一つになろうという意味が込められています。これは、パンデミックの発表前に作られたものですが、今回の状況に良く合ったモットーだと思います。

今大会は、このパンデミックによる数々の逆境を乗り越えたアスリートのパフォーマンスを目の当たりにすることによって、観客はその思いを共感するでしょう。嘉納治五郎は、「自分のことだけでなく、他者のために何ができるかということを常に考えて行動していく」という考えを持っていました。つまり、相

臨場感の高い映像による視聴を可能とするための 超臨場感映像技術の研究開発を推進する

超臨場感映像技術の研究開発を推進するとともに、オリンピック・パラリンピックに関
広く映像技術の周知広報を図る。



映像



内閣府ホームページ 2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けた科学技術・イノベーションの取組に関するタスクフォース事業計画
<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/olyparatf/project/pj8.pdf>

手に尽くすことは自分自身の向上、発展にもつながっていく。世界の連帯とはそういうことで、それがいかに大事なことなのかを示す大会になっていくのではないかと思います。

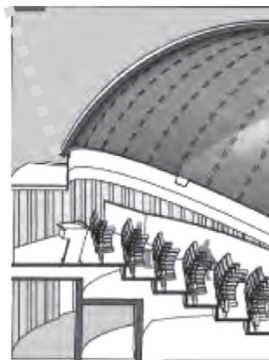
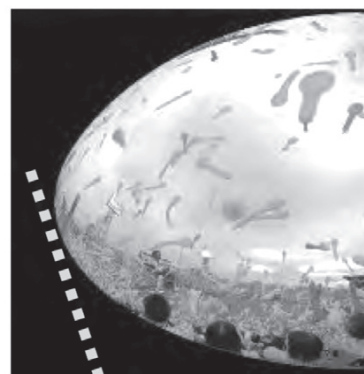
これだと思い出すのは、2016（平成28）年のリオデジャネイロオリンピック。女子5000m走予選で、接触して倒れた米国の選手とニュージーランドの選手同士が互いを助け合い、ともにゴールしたシーンです。さらに昨年のラグビーワールドカップでは、『ONE TEAM（ワンチーム）』として活躍した日本チームの姿も非常に印象的でした。これをさらに大きくして、世界はやはり連帯をしていくことが大事なんだ、ワンチームなんだということを示していくような、そういう東京2020大会にしていくべきであろうと思います。そのためには、やはりオリンピックの原点に示されていた疫病に絶対



2020年に向けた取組

概要

➤ 民間事業者等による関係する機関等に対し、



全天候

に負けてはいけない、負けずに開催を目指していくということが大事だろうと思います。

嘉納治五郎が今生きていたら、

「パンデミックだからこそ開催するべきだ」

と言ったに違いないと思います。

【参考】

*1 IOCホームページ

<https://www.olympic.org/news/ioc-president-back-writes-to-olympic-movement-olympism-and-corona>

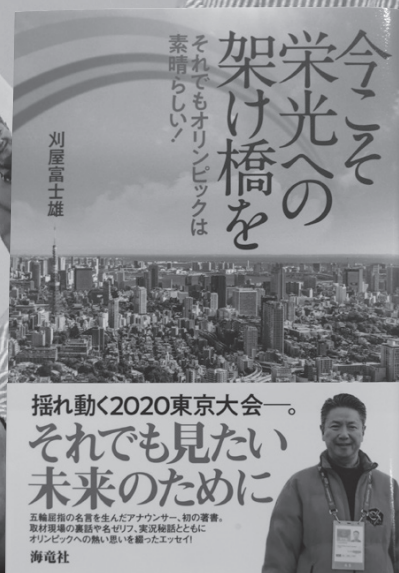
コロナ禍で考える

今こそ、オリンピックの未来のために

—— 刈屋 富士雄

構成 阿部雄輔
写真 山内亮治

オリンピック。大会を実況中継。この春NHKを定年退職した刈屋富士雄さんが本を書いた。オリンピック・パラリンピックの1年延期という選択をした以上、東京は、日本は、世界に対して最大限の努力をする義務を負う。オリンピックの存続のためにも、今こそ開催を前提に議論を！



刈屋 富士雄 (かりや・ふじお) 1960 (昭35) 年、静岡県御殿場市生まれ。早稲田大学時代はボート部に所属。早慶レガッタの対校エイトのメンバーとして出場。83 (昭58) 年NHK入局。スポーツアナウンサーとして、大相撲、陸上、体操、バレー、競馬、フィギュアスケートなどを中心に28競技の実況を担当。オリンピックは、バルセロナ大会から夏冬合わせて8つの大会を現地から実況中継、熱戦を伝えた。特にアテネ五輪体操男子団体決勝とトリノ五輪フィギュアスケート女子シングルの夏冬連続の金メダル実況は高く評価されている。バンクーバー以降の大会はNHK解説主幹としてニュース情報番組などで解説。大相撲取材35年、三賞選考委員会の司会担当。2020 (令2) 年4月30日にはNHKを定年退職。その後、東京立川市の立飛ホールディングスとスポーツプロデューサー契約を結び、スポーツのレガシー作りに取り組んでいる。日本スポーツ学会会員。

今年の4月3日で60歳を迎え、4月30日をもってNHKを定年退職しました。アナウンサーとして35年、解説委員として3年、38年間スポーツの現場、オリンピックを見続けてきたので、ひとつそれをまとめて本にしてみようと考えて8月に、『今こそ栄光への架け橋を それでもオリンピックは素晴らしい！』（海竜社）という本を出版しました。

このコロナの騒ぎの中でオリンピックの本なんか出して誰が読むんだという声もありました。もちろんコロナ終息が最重要、最優先であるのは当然ですが、同時に「1年ください」「1年後にやります」と宣言したオリンピック・パラリンピックについても今積極的に議論し取り組まなければ、開催都市、開催国としての責任を放棄するもの、オリンピックの未来についての責任を放棄するものだと僕は考えます。だからあえてこの時期に本を出しました。

1年延長してもらったのに大した議論も努力もせず安易に中止にしてしまつて良いのか。安倍晋

三首相が辞任することになりましたが、次の人の考えによつてはあつという間に中止になる可能性も無きにしも非ずです。

そもそもオリンピックが肥大化して世界中から200を超える国と地域が集まるようになってきた。そのすべての国と地域が公平に参加するチャンスを得られなければオリンピックを開けないということになったら、オリンピックは消滅の危機を迎えます。コロナが世界的に終息してみんなが参加できるようになるまで待つとしたら、まず来年は絶対無理だし、世界中が公平に参加できるような状況でなければオリンピックをやらないという前例を残してしまつたら、今後オリンピックを続けていくのが非常に難しくなります。

過去にも西側諸国がボイコットしたり、東側がボイコットしたり、アフリカが来なかつたということがありました。その中で集まれる国が集まつてやつてきたのです。ですから今、どうしたら開催で

きるのかということを前提にもつと議論を尽くすべきだと思っんです。

僕は小学生の時にメキシコオリンピックを見てすごく感動して、オリンピックの報道をやりたいという夢をずっと持ち続けてきて、NHKのアナウンサーになって、オリンピックの現場取材して、中継して——と夢を叶えてきました。だからオリンピックの価値を最も高く評価している日本人のひとりじゃないかと自負しています。

7年前に東京開催が決まった時の嬉しき、喜び、歓喜は忘れられないです。また東京でオリンピックが見られる。オリンピックで東京がまた変わる。日本のスポーツ界も変わる。東京の大会のウォーターフロントで、コンパクトにダイナミックに未来を見せる。オリンピックの未来、スポーツの未来、そして人類の未来、地球の未来を東京から世界に発信するんだという素晴らしいプレゼンテーションでした。「放射能がアンダーコントロール」っていう

のは嘘だろうと思いましたが、それ以外は僕なんかも真に受けて、感激したんです。

ザハ・ハディッドが設計したあの近未来的な国立競技場の模型を見に、わざわざロンドンのザハの事務所を訪ねて行ったりしました。彼女が学んだ建築学校も見てきました。模型を見た時は、これが新しい日本のスポーツ文化の象徴となるんだ、これから日本スポーツ文化が新しく変わっていくんだと大きな希望を持ちました。

「東京は嘘つきだ」と言われて

ところが2年後にザハの競技場案が白紙撤回となります。他にも競技会場の変更や競技場の縮小案などが次々と出てきて、国際競技団体からは、「東京は嘘つきだ」と言われ始めます。プレゼンテーションで言ったことと実際にやっていることが全然違うじゃないか。できもしない絵空事をIOC総会でプレゼンテーションして開催を勝ち取っていて、

「すいません、お金が足りません」「こういう事情です」ってどんどん変えて、それで良いのかと批判されました。その後にも東京のウォーターフロントに新設する計画だったボート競技会場を福島県登米市に移す話が急に出てきたりしました。

そういう姿を見ているうちに、だんだんやんなっちゃってきて。それまでオリンピックを取材してきた、開催都市や開催国ってだいたいバタバタするし、準備が疎かだったり先のことを考えてなかったりするのですが、東京だったらそんなことにはならないだろうと思っていたら、もつとひどかった。

たとえば暑さ対策。去年の夏、テストイベントを5カ所見て回ったんですけど、はつきり言って「なんちゃって対策」しかしてないんです。なぜかって質問したら、「これデータを採るためなんです。このデータにもとづいて本番はちゃんとやります」って。本来なら最後の夏ですよ。そこで本番レベルの対策を試していないのだから、本番でちゃんとでき

るとは思いますが。

IOCだって納得できませんよ。だから突然マラソンと競歩の会場を札幌に移した。マラソンはやっぱりオリンピックの華です。開催地の魅力を世界に発信する最大のソフトがマラソンなんです。それを開催都市に何の説明もなく移される。開催都市がIOCにそういう扱いをされるようになったということも失望感を深めました。

レガシーについての議論も盛り上がりません。たとえば2012年のロンドンオリンピックではそれまでロンドンにとって一番の課題だったイーストロンドン地区の再開発に成功しました。目に見えるレガシーです。だから2兆円とか3兆円とかインフラも含めて金がかかったと言われているのに、ロンドン市民はみんな大成功と思っています。オリンピックを機に、ロンドンはロンドン市民やイギリス国民に約束したとおりのものをつくったんです。

東京もできるんじゃないかと僕は7年前に思いま

した。でも全然そういうことも進んでいない。たとえば国立競技場ですが、ザハ・ハディッドがつくったあれだったら本当に多目的に使えて、陸上競技でもボールゲームでもこれから中心になっていくだろうし、屋根がしつかりと閉まる構造なので、コンサートなどの稼働率も高かったと思われます。

ところが今の国立競技場はデザインはたしかにおしゃれですが、屋根は中途半端。台風が来たらどうするんでしょう？ オリンピック・パラリンピックの開閉会式が4回、国立競技場で予定されています。僕は公の場で何回も質問しました。当日台風が来たらどうするんですか？ ゲリラ豪雨が来たらどうするんですか？ 落雷があつたらどうするんですか？ 誰ひとり答えてくれません。今後何かイベントをやるにしても必ずその問題は出てきます。

しかも今のところ陸上のサブトラックが常設ではないので、オリンピックの後、陸上競技の国際大会ができません。91年世界陸上でカール・ルイスが初

めて100mを9秒8台で走り、男子走り幅跳びでマイク・パウエルが8m95を跳んだ伝説の競技場でもう陸上競技はできないのか。それで本当に良いのか。そういう議論すら今、ない。

そういうふうに先のことも考えないで、しかもプレゼンテーションと全然違うかたちで「嘘つき」とまで言われながら準備を進めてきところへ、今度は新型コロナウイルスの感染拡大でやめるかやめないかという時に1年延期ということになった。

3月の時点では僕はやめるべきだと思いました。ひとつはやっぱりオリンピックは4年に1回の原則があつて、第一次世界大戦の時も第二次世界大戦の時も中止という選択をしてきた。今回も中止というのであればそれで良かったと思います。ところがそこで1年間先延ばしにした。ということは、1年間努力します、最大限努力しますと世界に約束したということです。その最大限の努力が今この夏の段階で見られるだろうか。「1年ください」と言つて、

最大限の努力もしないで、「ハイ、ダメでした」で世界に顔向けができるのか。1年という時間をもらったのだからもつと努力して努力して最大限努力して、やるんだっていう意志を見せて、世界中を説得すべきではないでしょうか。

オリンピックだからこそ生まれるシーンがある

予定通りの完全なかたちでなくとも構わないと思います。最低やらなきゃいけないのは競技会です。オリンピックを目指して鍛え抜いた選手たちがメダルを懸けて、人生を懸けて戦う。世界中のメディアが来ている。世界中が見ている。そのエネルギーはやっぱりものすごいんです。それが日本で行われる機会はもう一生に二度とないかもしれない。この機会を逃したくない。とくに若い世代、子供たちがいることが何よりも大事だという結論に至るんです。だからできれば無観客は避けたい。

2018年の平昌冬季オリンピックで人々の心に

残ったのは、スピードスケート女子500mで、敗れた李相花イサンファに勝った小平奈緒が激励に行って肩を抱いて言葉をかけた、あの映像でしょう。李相花は2010年バンクーバー、2014年ソチとオリンピックを連覇した韓国スポーツ界の大スターです。私が韓国に行っていた間も連日ものすごい報道で、国民的などんでもない期待を背負って彼女はあそこに立った。でも小平に負けた。

昔だったら韓国のスポーツメディアは李相花を叩いたらいいですね。でも今回叩く報道は一切ありませんでした。韓国の大学生たちが言うには、あのシーンで韓国のメディアも変わったんだと。ただ勝てば良い、ただ勝った負けたというのとは別のところにもスポーツの価値があることを、あのシーンが韓国のスポーツメディアに、スポーツファンに、そして若い世代にも見せたんだと。そしてあの映像が世界に配信された。それだけで僕は平昌オリンピックは成功だったんじゃないかと思うんですね。

経済効果やインフラ整備やオリンピックの波及効果というものは確かにありますが、でも一番人々の心に残り最終的に世界を変えていくのは私はオリンピックの舞台だからこそ生まれるシーンだと思うんです。1964年東京オリンピックの思い出をNHKの先輩たちに聞くと、新幹線でも首都高速でもなくて、やっぱりアベベがすごかった、ヘイズがすごかった、チャスラフスカのあの赤いレオタード姿が美しかったという話になります。そして各国の選手がごちゃごちゃになって入ってきた閉会式が今後の世界のあり方を世界中に見せたんだというような話。やっぱりシーンなんですね。それがその後の活力になり、日本を変え、世界を変えていく。社会を変えていく。

じゃあその1964年東京大会の最大のレガシーは何だったのか。僕はJリーグだと思うんですよ。20代だった川淵三郎さんたちが世界のサッカーに触れて、世界で活躍できるような選手、ワールドカッ

プに出られるような、オリンピックでメダルを争えるようなチームをつくりたい。日本中の子供たちが芝生でボールを蹴るような環境をつくりたい。プロのクラブができてサポーターでスタジアムが満員になるようなプロリーグをつくりたい——そういう夢をあの時に持った。そしてその夢は30年後にJリーグとして花開いた。

そう考えた時に、やっぱりこの2020年大会で世界の戦いを見せる、世界が注目する中でメダルを争う雰囲気を見せることがどれだけ日本の若者や子供たちのインスピレーションを掻き立てるか、そしてインスパイア、感化するだろうか。出資したお金だとか経済的なことなどを考えて、やめた方が良かったという空気が今後多分出てくるはずですよ。けど1年延ばした限りは開催することを前提に最大限努力すべきだと私は思います。そのことが10年後、20年後、30年後の日本を変えていく、次の世代の原動力になると私は今、確信しています。

アナウンサーをやめNHKを去る理由

NHKの場合、60歳の定年後あと5年残って同じような立場で取材することができます。だから定年を迎えた時に、5年残ってもっと報道した方が良いと引き留める人もいました。またNHKの最後の3年間は解説委員に専念していましたが、外部の人からは何でもっと中継しないのかと言われることがありました。でも僕は7年前にオリンピック・パラリンピック招致が決まった時点で、60歳までは取材を続け、その時までにはしゃべれる若手を育成し、自分は60歳を機にNHKを離れようと決めていました。

オリンピックを実況したい、伝えたいという夢を持ってNHKに入って、そしてアテネオリンピックで体操男子団体の金メダルを実況できた。その2年後にトリノオリンピックで荒川静香さんの金メダルも実況できた。そしてその4年後のバンクーバーでキム・ヨナと真央ちゃんのすごい試合も中継でき

た。夢が叶った、やりきった感がありました。

そして私の中継スタイルは自分で言うのも何ですが、他のアナウンサーと違うんですね。放送中に言う言葉を事前に準備することはほとんどありません。その試合の流れの中で、そのたび、その状態の中で浮かび上がってきた言葉のみが生命を持つと考えるからです。NHKに入った時からほぼそういうスタイルで、そこに知識や経験や技術的部分が加わってある程度完成したのが40代です。

アテネオリンピックは44歳の時ですけど、それまでの十何年かの体操競技の取材の蓄積があつて、その場で自分が必要としている知識がパツと瞬時に引き出せるし、状況に応じていろんなものが目に入ってくるし、こうなったらこうなるとか次のことも考えられる。そして目の前で起こっていることを表現する言葉は次々と浮かんできました。

50代になった時、そのスタイルだと反射神経が追いつかなくなってきたんです。何でこの時この言葉

が浮かばなかったんだと、その葛藤が出てきた。0
コンマ何秒、遅れたなど。スポーツ中継は言葉の選
択とタイミングが命です。これによって伝わること
もあればまったく死んでしまうこともある。

もちろん経験値があるのであるレベル以上の放送
はできます。試合の展開についていけないなんてこ
とはないんですが、ついていくだけではテレビを見
た人にとっては、「見りや分かるよ」なんです。 「見
りや分かるよ」のちよつと先を行きたいんですよ
ね、僕は。視聴者よりもちよつと先を行きたい。視
聴者よりもちよつと深みのある言葉を言いたい。分
かりやすく放送したい。分かりやすいけれども深い
放送をしたい。深い放送をできる限り面白く伝え
たい。この3段階のステップを放送している時にし
っかり自分で意識してコメントを選択できなくなっ
たら、ごめん、僕はもういいかなって。

そこまでいかない限りは、インターネットやこの
多メディアの時代には勝てないです。次々といろん

なメディアが来る。映像は進む。8Kになる。そし
て映像を視聴者が選択するようなテレビになる。そ
うなった時に「見りや分かる」言葉では勝負にな
らないし、ましてや視聴者に遅れたら、そんな言葉
は死にます。だから視聴者よりちよつと早く、分か
りやすく、深く、深いことを面白く伝えることがで
きなくなった時点で、僕はもうやめようと思いまし
た。

もうひとつ、やっぱりNHKは組織で人材育成
をしています。スポーツアナウンサーは経験しなけ
れば育ちません。オリンピックでしゃべらせなきゃ
ダメなんです。何年研修を受けさせるよりもオリ
ピックの場で一回しゃべらせる。一発目で良い放送
ができるアナウンサーはいません。間違いなくあの
会場の空気に負ける。映像の迫力に負ける。そして
2回目、あるいは2日目は次のことができる。それ
を経験させなければダメなんです。

われわれのはるか先輩は若手に場を譲りませんで

した。その先輩たちがいなくなった後、NHKのスポーツアナウンサーに空洞ができてしまった。これを何とか防ごうとプロデューサーたちが若手に経験を積ませる、次の人に譲るということをやつてうまく育成してきた。今はアナウンサーが次のアナウンサーを育てようという時代です。

定年退職後の目標に向けて着々と

じゃあ2020年を機に何をやるうか。試行錯誤はありましたが、3、4年前から手づくりのスポーツイベントをやつていこうと考えが決まりました。

まずアマチュア相撲の底辺をもう一度掘り起こしたい。アマチュアの相撲は昔全国にいろいろとあつて、だいたい他の競技と掛け持ちでした。野球部の強いやつらが村相撲に出てきたり、サッカー部の足腰の強いやつが出てきたり。日本のスポーツ文化で今最も大事なことは子供たちが複数の競技をやることだと思ふんですよ。複数の競技をやつてそのなか

ら自分で選択する、指導者も自分で選ぶ。そういう環境をつくれなにか。そのためにはアマチュア相撲の国際大会をやりたいんです。

大会をやるにあたつて、どこが良かったらうかつていろいろと探して歩いていたら、^{たちひ}「立飛ホールディングス」という会社を知りました。太平洋戦争敗戦まで「隼」^{はやぶさ}など陸軍の戦闘機をつくつていた「立川飛行機」を前身とし、立川駅の北側に東京ドーム21個分、立川市の1/25ぐらいの土地を持つていて、その土地と格納庫を転用した頑丈な倉庫を賃貸するだけでぐらくらく経営が成り立つような会社です。10年前の2011年に持株会社を設立して会社を再編し、村山正道さんつていう社長がやっぱこれだけの土地を持つている社会的責任を果たそうと考え、地域貢献のためにスポーツ施設をつくり始めるんです。アリーナをつくり、ドームをつくり、巨大な砂場をつくつてビーチバレー、ビーチサッカーができるようにしたり、フットサルのコートやプール

や多目的ホールをつくったり。

2018年、19年には「立飛」のアリーナで大相撲の夏巡業が行われました。私は巡業を見に行つてその会社を知ったのですが、土地がいつぱいあるし、やる気があるし、何より実行力がある。私の方から申し出て、スポーツプロデューサーとして契約してもらいました。アマチュア相撲の大会の話も進めていますし、今、コロナで中学、高校の相撲の大会がぜんぶなくなっていますので、中学、高校、大学の日本一を決める大会を来年元日にやろうという話が着々と進んでいるところです。

学徒出陣壮行会ラジオ中継の真実とは

本の最後に志村正順さんのエピソードを書きました。講演では必ずこの話をし、NHKの後輩にもたびたび話し、かつて「日本スポーツ学会」の講演でもお話ししたエピソードですが、この機会にもお話しさせていただきます。

志村さんはNHKのスポーツアナウンサーの大先輩で、第一線にいらしたのは1960年頃までです。から、僕も放送を直接聞いたことはありません。機関銃のようにしゃべり、しかも本当に適切な言葉をしゃべる、天才と呼ばれたアナウンサーですが、その志村さんと僕は一回だけ会っています。志村さんは2007年に94歳で亡くなっていますがその2年前、ご自身の野球殿堂入りのパーティーでした。

野球関係者以外で初めて殿堂入りした方が志村正順さんです。1952年ヘルシンキオリンピックの中継をした帰りに志村さんはアメリカに立ち寄って大リーグを見に行きます。そうしたら前年に現役を引退したヤンキースのジョー・デイマジオが解説をしていた。それを見て、引退後の選手の解説とアナウンサーの実況で放送するスタイルがあるということとを勉強して日本に持ってきたんです。今では当たり前のこのスタイルをつくったのが志村正順で、その功績が評価されて野球殿堂入りをしたわけです。

パーティーは野球界やスポーツ界の大御所や、大相撲の親方衆など重鎮ばかりが集まって、僕は当時45歳、にもかかわらず一番の若手でした。本当に錚々たる顔ぶれで、僕は会場の出入口の一番近くのいわゆる末席にいました。最後に志村さんが挨拶に立たれた。それまでのお祝いの言葉に対する謝辞や自慢話、思い出話などほとんどせずに僕を、僕をとこのもおかしいんですが、僕の方を向いてしゃべりだしたんです。それが学徒出陣壮行会のラジオ中継の話でした。

学徒出陣壮行会が神宮外苑競技場で行われたのは1943年10月、終戦の2年ぐらい前ですが、当時すでに戦況がかなり悪化してきていて、それまで兵役を免除されていた大学生たちも戦場に送って情勢を挽回しよう、神宮外苑で出陣式を行って、それをNHKがラジオで生中継することで全国民を鼓舞しようという大々的な国家プロジェクトでした。

実況担当は当時NHKのスポーツアナウンサーの

エースだった和田信賢さん。まだ若手だった志村正順さんはサイドにつくはずでした。ところが当日、生放送の時間になっても和田さんが来ない。前日飲み過ぎて体調を崩したということでした。急遽志村さんが実況することになって、実況力は当時から素晴らしいですから、みごとに実況をした。上司から言われた通り、国から言われた通りに、聴く人を鼓舞するような、煽るような、これで情勢が変わるんじゃないかみたいなニュアンスで学徒たちを送り出した。それが評判になって、以後志村正順アナウンサーはスター街道を驀進していくんです。

ところが10年後って言ったかな、かなりたつてからですよ、志村さんはある人からその時の真相を聞くんです。あの時和田さんは今さら大学生たちを戦地に送っても情勢は何も変わらないことを知っていた。ただ死なせに行かせるだけだ。死に行く若者を送る中継なんだ。であれば煽り立てるような放送ではなく淡々と事実だけを伝える中継にすべきだ。

それが死に行く若者たちへの礼儀なんだと言って、NHKの上司と延々と議論したそうなんです。上司としても国から国民の士気を高めるための国家プロジェクトだと言われているので認めるわけにいかない。それで和田さんは外された。

それを聞いて志村さんはものすごいショックを受けました。自分は上司の指示通り一生懸命国民を鼓舞するような実況をした。今考えると、あの時の学生たちの多くが生還しなかった。そう思ったら、上司に言われるまま中継して、それが認められて有頂天になっていた自分が本当に情けない。真相を知った志村さんはほぼ鬱状態になったそうです。

遺言を聞いた一番若い男として

アナウンサーとしても早くに一線を退き、NHKをやめた後は神奈川県藤沢の自宅や奥さんの実家のあった名古屋に引きこもって、ほとんど表舞台に出てこなかった。あれだけのスターアナウンサーでし

たから、いろんなところから引く手があつたらしいんですけどぜんぶ断つて、何十年ぶりに表舞台に立ったのがそのパーティーだったんです。

本人は、これが遺言になるかもしれないとおっしゃっていました。最後のチャンスだと思うから今日来たんだと。恐らく今の話を若い世代に言うために出ていらしたんです。だからもうマイクを持つたらずーつとこつちを見ながら今の話です。さらに途中からは泣きながら、「いいか、NHKのアナウンサーは、NHKのスポーツアナウンサーは二度と国民を戦地に送る中継はしないでほしい。二度と上司に向かって中継をしないほしい。国民に向かって視聴者に向かって中継をしてほしい。これが自分の遺言だ」とおっしゃいました。

僕はそれを受け取った一番若い男なんで、伝えていく使命があるのです。

(本稿は2020年8月29日、東京都渋谷区内で行われた講演をもとに構成したものです)



コロナ禍
で考える

コロナ禍での心の中をみつめる

—— きたやまおさむ氏に聞く

構成 長田渚左／写真 山内亮治

戦後75年、コロナ禍の時代の中で人はいやがおうにも自分自身と向い合うことになった。ミュージシャンで精神科医、臨床心理学者、作詞家、いくつもの顔をもつ、きたやま氏は、今の時代をどう感じているのか……!?

きたやま おさむ 1946 (昭21) 年生まれ、京都府出身。本名、北山修。精神科医、臨床心理学者、作詞家、ミュージシャン。京都府立医科大学在学中の65年、龍谷大学の加藤和彦らと共にザ・フォーク・クルセダーズを結成。68年のグループ解散以降は、『あの素晴らしい愛をもう一度』『戦争を知らない子供たち』などのヒット曲を作詞。71年から学業に戻ると、音楽活動の傍ら、精神科医として医院の開業や、九州大学大学院教授に就任するなど医学の道へ。専門は精神分析学。現在、九州大学名誉教授、白鷗大学名誉教授。著書多数。

——新型コロナウイルスの感染拡大を「第三次世界大戦だ」という人もいましたが？

きたやま そうそう。何事も原因が分かれば解決の糸口が見えやすいけれど、何だか分からない、見えない時は不安だし、恐怖でしたね。最近はウイルスについて見えてきた部分も増えてきたので、まったく不明だった時よりは希望を感じられるようになってきました。まだ時間は必要だろうけど、ワクチンや治療法について不明な点は少なくないものの、それでもはじめの頃の恐怖とは違ってきていますね。

——戦後75年、コロナ禍で自分自身をあらためて見つめ直す機会にもなった気がしますが、いかがですか？

きたやま 日本人は元々同調圧力が強いと言われてますよね。みんな同じでないとだめ、画一主義ね。本当はオレはオレなんだと思って勝手気ままに生きたいのだけれど、コロナ禍では球場にも行けず、スポーツジムに行くのもままならなかったから、我慢

に我慢を重ねて“いつ何時、爆発するのか？”みたいなものが充満していました。無機質な壁に向かつてぶついているならともかく、精神衛生上、悪かったですね。

攻撃性と可能性

——内面を見つめる時間が増したように思いましたか……。

きたやま 人間が人間であるために自覚していなくてはいけないことがあります。ルールや掟おきてなどを言葉で理解しておかなければなりません。

それは宿命でもあります。一方で動物や植物は違う。植物は光に向かい、水を得ると生き生きします。動物は馬も鹿も生まれてすぐに立ち上がるし、誕生して間もなく自分で食べ物を取りに行けます。かなりの部分で本能のままに生きている。セックスもできし、死ぬのも自然に見える。でも人間は方法に身に付けて、知恵をつけて、言葉で理解していく必

要がある。人間はルールで本能を律していかないといけない。学ばないとね。自分の中の残酷さや残忍なところも自覚してコントロールしなくてはならない。

——人間の中の残酷さですか？

きたやま 弱者や少数集団、マイノリティーに向かって攻撃的になる。弱い者を見つけて、誹謗中傷^{ひぼうちゅうけう}する。弱い者いじめです。しかも人間はそれを何かに置き換えて処理する。例えば会社の上司に何か文句を言いたいんだけど言えない場合、猫の尻尾を踏んづけて気を晴らすとか、飲み屋のお姉ちゃんをからかって気分を変えるとか……いじめの代償、置き換えもする。また攻撃が他人に向かうのではなく、自分を追い込んで自傷する。あるいは『自分さえいなければ』と思って自殺する。これは動物ではあまり見られない人間社会の特徴でもあります。

——「with コロナ」の生活はまだまだ続くとして、心の変化をどうとらえますか？

きたやま 欲求の中の攻撃性の処理はテーマになるでしょうね。傷つけたい欲求や破壊、攻撃性は、今まではスポーツを見たりすることで置き換えられ、中和されていた。その機会そのものが奪われている。他にも「アイの衝動」というものがある。アイは人への愛ばかりではなく、会う、合うなど様々な意味があります。性欲はもちろんのこと、食や人の出会いや、人との親密さ。いわゆる intimacy（親密な関係）の機会を失っているから希望を見いだせなくなっている。

——今はパソコンで例えば『Zoom（ズーム）』を介して、人と顔を見て話しながら同じ時間を共有できます。会議や飲み会もできるようになりました。

きたやま 確かに今までなかった方法での出会いもあります。ズームやオンラインでの出会いは、ある意味で生臭い感じがある。日常では相手の顔を真正面からアップで見続けることはないのに、どアップ

で見続けるという妙な点がある。行ったことのない人の家の中をのぞくことでもある。まあズームやオンラインの可能性はまだ分からない点も少ないないけれど、文明の利点ではあるでしょうね。昔から新しい物が出てくると、激しく批判したり、文句を言うのが常でした。ラジオや電話、映画やテレビ……どれも同じです。進歩や進化は止められない。

——きたやまさんはズームでコンサートも発信していますが、いかがですか？

きたやま やっています。ただし観客の存在する生のコンサートと違うのは、横のつながりがないことです。

——横ですか？

きたやま そう、バンドだったら隣で演奏しているミュージシャンがいるはずだし、スタッフもいる。それがズームだとみんなが一人一人で演奏したり、歌ったりしてタコ足でつながっているだけだから、♪あの時、同じ夢を見た心と心が今はもう通わない

……連帯がない。今はソーシャルディスタンスだから実生活での飲み会、宴会、女子会、オヤジ会というネットワークがないことが、新しい孤独を生むのだらうと思います。そこで気をつけなくてはならないのは、横をつなごう、つなげようとする妙な宗教ですよ。

——不安や寂しきなどでできた心の穴に入り込もうとする新興の宗教などですか？

きたやま ズームを使うと互いの横を見ないで、一度に900人くらいとつながることもできるから、使い方次第でしょう。警戒はしておいてほしいです。

深層心理と処世術

——ステイホームで自粛していても不安は消えないという今までなかった経験を私たちはしています。ですがこれを乗り越えようと、生身で人と会えたときの喜びなど、過去になかったような新鮮な気分にな

りませんか？ 1920年にスペイン風邪が下火になってジャズが流行したように……。

きたやま うーん。まあ乗り越えられれば……ね（笑い）。ただ冗談のように言うけど、人の攻撃性やいじめたいという衝動は、いくらやめようとしてもやめられないところがあつてね。他人に向かわなければ自分自身へ向かつて馬鹿をやつてしまう。自分をいじめてしまう自傷などですね。今は毎日異なる人がいじめの対象になる時代になっているのではなにかと思つています。例えば芸能人やドジな政治家などテレビや週刊誌を見ながら、人の不幸や不備をみんなでボロクソに言うでしょう。『こいつ馬鹿だ』と軽蔑する。あの人たちは特殊な役割を担つていると思いますね。

——対岸の火事を見ながら人は実生活での心のバランスを取つていくということですか？

きたやま アメリカでも日本でも、一般人の私生活売り物にするようになりアリティーショー番組が問

題になりました。出演する人間の問題点がさらけ出されると、SNSなどで集中砲火を浴びる。それは大変なことになって、この世から退場しなくちゃならないような心持ちにさせられて、ものすごく残酷なことになってしまう。誰がそのターゲットになるか分からない時代です。一般的に人は長生きすることを平和の目標にしていると仮定するならば、どういった深層心理がそういうメカニズムを作り出すのかを知っておくことが処世術だと思いますね。

——人は攻撃することで連帯し、雪だるま式に攻撃力を増してスケープゴートに向かうということですか？

きたやま そうですね。ただかゝ小さな尻尾^{シッポ}が見えたぐらいのことなのに、増長増強して突然、襲いかかるみたいなことになってゆきます。それは予定通りに決められたものではなく、突発する。

——それはコロナ禍の影響も重なりますか？

きたやま まったく感染者のいない県で、誰が感染

者第一号になるのか？ またはある学校のごく一部の人が感染しただけなのに、学校にかかわる全員がその周辺地域から排除される。あるいは医療関係者の子供というだけでいじめの対象になったりして、「一寸先は闇」という現象も見られた。

日本人と民話

——不安が不安を呼ぶ状況は、人から冷静な判断を奪い、攻撃性を増幅させるのですか？

きたやま 新型コロナウイルスに感染したらどう感じるのか？ という問いに、日本人は諸外国の人に比べて「自業自得だ」と答える割合がかなり高い。まさにそれが日本人だと思いますよ。

——自分の良くない行動の報いが自分に返ってきたと考えるということですか。

きたやま 日本はいつも全体の調和や協調、つまり和を重んじる。そこには、それでこの国はうまくいつているのだという印象がある。では、その裏で

何をやっているのか。やるせない、悶々としたものを誰かにぶつける。またはその対象を探して、ぶつけている。

——うーん。そのターゲットが他人、それも弱者に向かっているとすると……それは陰湿ですね？

きたやま そう。だから私のアドバイスはいつも被害者に向けられるものなのですが、いつ何時、加害者のターゲットになって、どんな受け皿にさせられるか分からないから、人の深層心理を勉強しておくことが大事になると思うんです。

民話の『鶴の恩がえし』あるいは『鶴の女房』を覚えていますか？ それらをもとにして書かれた木下順二の代表作で『夕鶴』という戯曲もあります。大筋は矢が刺さって苦しんでいた鶴を与ひょうが助ける。するとある日、与ひょうの家につうという美しい女性がやってきて「女房にしてほしい」と言う。つうは機を織る。素晴らしい反物を作り、与ひょうを喜ばせる。与ひょうの知り合いの惣どと運ずは

「これは大もうけができる」とけしかける。与ひょうもつうに「もう一反織って」と頼む。つうは承諾するが「機を織っている間は決して部屋をのぞかないで下さい」と念を押す。しかし、与ひょうはのぞいてしまい、立ち尽くす……。あるいは驚いて倒れてしまう。つうは自らの羽を抜いて機を織っていたことを知られ、鶴になつて空へ消えてゆく……。

この話は日本中に流布しているので、あちこちで少しずつその内容は異なるけれど、つうが鶴だと分かった時、与ひょうは立ち尽くすか、あるいは驚いて倒れるだけ。彼がそれでも「つうは鶴でも人間なんだからかまわない」と言つて立ち向かえばいいんだけど、与ひょうは鶴を見送つてしまう。

それを見た惣どと運ずは「鶴だ、鶴だ、怖いよ」と騒ぐ。『みんな』を代表する同調圧力です。人間のふりをしている鶴を許さない。一人一人が違うということを許さないわけです。人間は一人一人が異なつて、それぞれの中に鶴やライオンや猿がいるの

に、一見すると同じような人間のふりをしている。それがあるとき鶴や猿だと言われて排除されることになる。これは怖いことです。日本人の中で非国民になつてしまうわけです。

——人種差別などは諸外国にもあると思うのですが、日本という村社会には根深いものがあるということですか？

きたやま 確かにどんな国にも多かれ少なかれ差別や同調圧力があります。ただし例えば精神病にかかるとしても、日本では以前「二重に不幸になる」と言われたのです。「精神病にかかった不幸」と「日本で精神病にかかる不幸」と二重に不幸だという意味です。だから「精神病になるなら日本じゃない方がまだいい」と言われました。つまり鶴や猿と同じようにばれると排除の対象になる。炎上とか言いますけどSNSなんか本当にひどい状況になるでしょう。だから人の心理、特に日本人社会の深層心理を学んでおいてほしいのです。人生はある意味でサバ

イバルなんです。“人の噂も49日”だから生き残るための知恵も必要です。

——ところで、つうがもし現代の女性なら『約束を守らず、のぞいた与ひようが悪い。せつかく楽しく暮らしていたのに幸せをぶち壊した』と猛反論するのではないでしょうか？

きたやま 確かにね。しかし、それ以前に「二反目を織れ！」と言われたら「NO!」と断ることが必要でしょう。他にも蛇が赤ちゃんを育てる蛇女房は、子に自分の眼球を差し出す。子は目玉をなめて成長し、子が成長するために新たに眼球を与えて両目を失ってしまう話があるのだけれど、日本には自己犠牲を称賛する文化がある。そして潔く、この世を去る人を褒める文化もあります。

未来とスポーツ

——ところでコロナ禍を生き残るための話に戻りますが、スポーツは人間の持つ暴力性をコントロール

する側面があり、発展を遂げてきました。しかし、今は球場にも行きにくく、自らスポーツをする機会も限定されています。今後のスポーツのあり方についてはどう思われますか？

きたやま オリンピックそのものは大昔、戦争の代わりに発明されたものですし、その原点では人間が動物と戦うのを見て楽しんだこともあったわけですね。今でも野球では一塁で殺された。二塁で刺された。三塁を盗まれた……といった表現が残っているけど“紳士のスポーツ”みたいななくくりで、スポーツの可能性を恥じないでほしいね。人間の残酷性をうまく処理する装置として、スポーツに取って代わる物は今後もないでしょうから……。

——スポーツは人間の根深いところと響き合い、人間が生きるためのバランスを保つものと言えそうですね。

きたやま おっしゃる通り。同感です。



コロナ禍
で考える

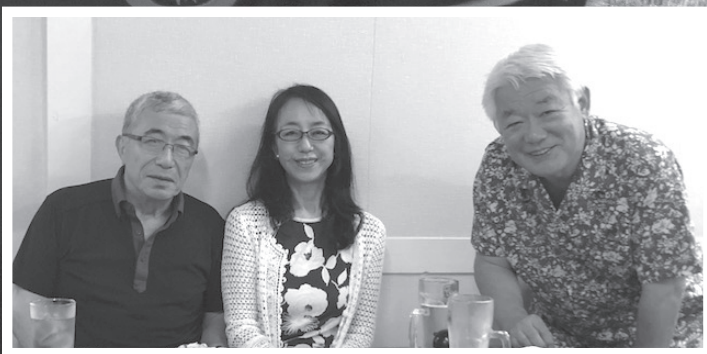
アメリカの現状

—— 八田忠朗氏に聞く

取材・構成 長田渚左



2017年来日の折に会食。
八田(左)長田(中)太田章(右)



八田 忠朗(はった・ただあき) 1942年、中国・北京生まれ。“日本レスリングの父”と呼ばれた元日本レスリング協会会長の八田一朗の次男。慶応高校時代にレスリングで全国制覇。61年に父の勧めで米国オクラホマ州立大に留学。52kg級で全米学生王者になる。引退後は米国男子代表コーチとして88年ソウル大会など8度のオリンピックを経験。04年アテネ大会から米国女子代表コーチとなり、現在は支援コーチを務める。日本では公式戦119連勝だった吉田沙保里の連勝を止めたマルシー・バンデュセン(米国)のコーチとして知られる。現在もオハイオ州に在住。

——世界的なコロナ禍です。米国はどのような状況ですか。

八田 今年、コロナの感染拡大のニュースが流れてきた時から、レスリングは身体と身体が触れ合うコンタクトスポーツですから、体育館のマットを、しょっちゅう消毒していました。手や足にも消毒のアルコールスプレーをかけて、スパーリングの前後にお互いシューシューやって、ものすごく気を配っていました。ところが2020年東京大会の選考大会の一つでもある全米選手権の直前に、コロナの影響で試合も練習もすべて中止になりました。

——国際オリンピック委員会（IOC）の東京大会の延期決定は3月24日でしたが……。

八田 日本もそうだったでしょうが、合宿中止、トレーニングセンターも使用中止になりました。他の競技も同じような状況でスタッフも頭を抱えていました。コロナの感染拡大について、トランプ大統領の発言がとても妙だったんです。「感染拡大は民

主党のデマだ」とか「コロナは漂白剤を飲めばOKだ」と言ったり……それをまた真に受ける人間も多くて、重大なこととは全然思っていなかった。それでどんどん拡大した。マスクもお馬鹿さんが多いから、しない人が多かつたね。

——諸外国ではマスクを着けることへの抵抗感が大きくて、イギリスなどは『顔にするオムツ』などと嫌っていました。

八田 まあ個人主義のお馬鹿さんが多いのだけど、そんなこと言っているうちに急速に感染拡大して、1日に千人が亡くなる、8分に1人が亡くなってゆく……と大騒ぎになりました。

——東京大会の延期が決定して、米国の人々はどう思っていますか？

八田 日常、一般の人からオリンピックの話題はないです。今、こっちの人はそれどころじゃないんですよ。一般の労働者はコロナ禍でも働きに出ないじゃない日常を抱えています。いくら「家に

じーっとしている」と言われても、お金のない人は働きに出なければならない。日本みたいに国民健康保険が整備されていないから、なかなか医者にも行くにくい。オバマ前大統領が保険を整えるためにいろいろとやっていたけれど、トランプはオバマのやろうとしたことすべてをひっくり返しているように、格差がますます広がっている実感があります。そこに黒人差別の問題が重なった……。

——5月下旬にミネソタ州で警官に首を地面に押し付けられて圧死したジョージ・フロイドさんの事件ですか？

八田 そうです。それまでも差別や格差の問題はたびたびあったけれど、あれから黒人差別に対するデモがしょっちゅう行われるようになりました。そして、そのデモに反対する人たちとの衝突もすごい。つい先日にも17歳の男が戦争で使うような自動小銃を乱射して2人が亡くなりました。

——コロナ禍で身を縮めている上に、さらに何が起

きるか分からないという日常ですか？

八田 そう。本当に毎日何が起こるか分からない。今までにない生活です。だから一般の人からはオリンピックのオの字も出ない。レスリングの全米選手権は10月9、10日にアイオワ州で開催されることになったけれど、僕は行かないことに決めました。実績でトップクラスの選手も参加しないようです。

——人命が第一ということですか？

八田 アイオワ州は感染者がとて多いのにコロナへの規制が緩い州で、マスク着用についてもうるさくないと言われているんです。

——それでもIOCや日本の組織委員会はオリンピックを来夏に開催する準備をしています。八田さんご自身の実感はどうですか？

八田 開催したいという気持ちは分かりますよ。僕だってコロナが騒ぎになる前は、また日本に行けるのを楽しみにしていました。でも普通に考えて「東京は感染が落ち着きましたから、どうぞ」と言われ

ても、ブラジルやメキシコなどの感染者増大を思うと、選手、スタッフ、観客は海を渡って行かれないでしょう。オリンピックは200を超える国から人が移動してくるわけで、よほど違うカタチでの開催を考えないと無理でしょう。

——もし米国での感染状況がさらに悪化して、オリンピック選考大会の開催もままならず、日本に選手団を送ることが難しいとなると、オリンピック放送権を持つNBCが中継しないという可能性もありますか？

八田 まだそういう話はないけれど、アメリカの選手が参加しない大会を中継することはないでしょうね。ただし各競技団体のスタッフの中には『オリンピックの前までにはワクチンが完成するだろうから大丈夫』と言う人も少なくないです。

——樂觀的な人々ですね。

八田 レストランやバーに入るにも、最近はいしやルディスタンスやマスク着用が条件で貼り紙も

しているの、かなりの人がマスクを着けるようになってきましたけど、黒人差別に抗議するデモと、それに反対する人たちとの衝突は相変わらずです。

——テニスの全米オープンを制した大坂なおみ選手が、試合のたびに人種差別で犠牲になった人の名前が付いたマスクを着用して話題になりましたが、米国の人々の心にも響いていたのですか？

八田 もちろん、こちらのニュースでも好感をもつて伝えられていました。以前、アメリカンフットボールの選手が試合前の国歌演奏の時に、普通は起立したままなのに膝をついて人種差別に抗議しましたが、それ以来の強いインパクトがありました。

——くれぐれも、諸々ご注意して生活してください。

八田 買い物ぐらいしか外に出ないようにして、コロナ禍の収束を祈ります。またいずれ日本に行きませんが、正直、今こちらはオリンピックどころではないです。(米国オハイオ州の八田忠朗氏に電話で取材しました)

2020年東京オリ・パラは、 既に目的を達成した!?



スポーツ・文化評論家
玉木正之

1年延期となった東京オリンピック・パラリンピックは、来年7月23日に開会式を迎えることができるか？ それとも中止となるか？ IOC（国際オリンピック委員会）のトーマス・バッハ会長は、再度の延期はないと明言している。ならば、すべてはコロナとワクチン次第と言うほかない。

新型コロナウイルスCOVID-19の世界的蔓延^{パンデミック}が、今後どのような終息を迎えるか？ あるいはまだ危険な感染状況が続くのか？ ワクチンは、いつ頃から実用化されるのか？ 通常は数年かかると言われているが、日本政府が希望するように、来年の前半にはそれが手に入るようになるのか？

この原稿を書いている現時点（前年9月）での予想は不可能だ。が、そんなときこそ、改めて考え直してみたい問題がある。

シンプルな理由

いったい何のために東京オリンピック・パラリンピックを開催することになったのか？ 意外なことに、それはあまり知られていない。

3・11東日本大震災からの復興のため、あるいは復興したことを世界に示すため、という人がいるかもしれない。が、東京にオリンピックを招致しようと決定したのは、3・11よりもはるかに前のことだ

った。2016年のオリンピックの開催都市は、その7年前の09年にコペンハーゲンで開かれるIOC総会で決定されることになっており、IOC（日本オリンピック委員会）やスポーツ議員連盟の面々は、21世紀になった頃から日本でのオリンピック開催を画策し始めていた。

当初は、1964年の東京五輪以来半世紀で、もう一度日本でオリンピックを！というシンプルなる理由から始まった動きだった。しかし、その声に呼応して手を挙げたのは、福岡と札幌だけで、その2都市では、五輪招致合戦の闘いに勝ち目があるとは思えなかった。

1984年のロサンゼルス五輪で、組織委員会会長のピーター・ユベロス（その当時43歳）という実業家が実践した「商業化」の結果、税金を1セントも使わずに多額の黒字を出す大会運営に成功。以来そのやり方をそっくりIOCが踏襲し、商業化と肥大化の拡大路線を歩み始めたオリンピックは、財

政的にも豊かで国とも強い関係のある首都クラスの巨大都市でなければ、事実上開催は無理と言われるようになっていたのだ。

東京から日本を変える

このままでは88年大会の招致合戦でソウルに敗れた名古屋、08年大会招致で北京に敗れた大阪に次ぐ連続敗退になりかねないと思ったIOC関係者は、石原慎太郎東京都知事の特別秘書官だった高井英樹氏に、なんとか東京が五輪招致に立候補してくれるものかと話を持ちかけた。そこで、高井秘書官が05年2月に東京五輪招致を石原都知事に進言したところ、都知事は即座に「面白い！」と即断即決。それは「東京から日本を変える！」をスローガンにしていた石原都知事にとって、自らの活動を力強く後押ししてくれる巨大イベントにほかならなかった。そんな動きの一方で、スポーツ議員連盟の面々には、まったく別の狙いもあった。

スポーツ振興法の改定

それは64年の東京五輪開催をきっかけに61年に制定されたスポーツ振興法の改定という問題だった。何しろ半世紀前に作られたスポーツに関する法律だから、アマチュア・スポーツと体育に関する記述はなく、プロ・スポーツのことは1行も触れられていないばかりか、障害者スポーツ（パラリンピック・スポーツ）についての記述も皆無。

時代遅れも甚だしい法律を中心に動いていた日本のスポーツ界は、スポーツ行政においても制度が整っておらず、体育とアマチュア・スポーツは文部科学省、障害者スポーツは厚生労働省、プロ・スポーツは経済産業省、スポーツ施設の建設補修は国土交通省……といった具合に縦割り行政が定着していた。そんななかで日本のスポーツ産業の規模は年間約5兆円と言われていたが、それは企業や家庭内の消費額から計算した概算で、スポーツ・ウェアは繊維

産業、スポーツ・イベントの入場券は娯楽産業、スタジアムでの食事は飲食業……等々、スポーツ産業としての統計データすら存在しなかった。それに対してスポーツ産業王国のアメリカは約30〜50兆円、プロサッカーの巨大市場を誇るEU（ヨーロッパ連合）は約20〜30兆円で、この数字を人口比で考えれば、日本のスポーツ産業は約15兆円まで、3倍近く伸ばすことが可能だと考えられた。

振興法↓基本法へ

そのためには、まず時代遅れのスポーツ振興法を現在のスポーツ事情に即したスポーツ基本法に改め、スポーツ政策・スポーツ行政を統合的に司るスポーツ庁の新設が期待された。が、折しも行財政改革が唱えられる時代にあつて、法律の改定だけならまだしも、新しい省庁を設けることなどまったく考えられることではなかった。

しかし、もしも、オリンピック・パラリンピック

を日本に招致することができれば、ひょつとして、すべてのことが一気に実現に向かって走り出すかもしれない……。

そこで、東京都（石原都知事）、JOC、スポーツ議員連盟などの思惑が一致するなか、まず05年8月に石原都知事が東京オリンピック・パラリンピックの招致を正式に表明。翌06年8月にスポーツ団体関係者による投票で福岡と東京が争い、東京が日本のオリンピック・パラリンピック招致の代表都市に選定された。

が、東京都民の五輪招致への意識が低かったことや、スポーツ基本法等の法整備が遅れたことなどから、16年の五輪招致ではリオデジャネイロに敗退。

任期満了が迫っていた石原都知事は、自身の後任に神奈川県知事だった松沢成文氏を内定。五輪招致は「次の知事が決めること」と言いながらも、招致委員会は「国際スポーツ東京委員会」と名前を変えて残り、いつでも20年五輪のための招致委員会とし

て活動を再開できる態勢を整えた。

そこへ新都知事に立候補した東国原英夫氏が、東京五輪招致の見直しを表明。世論調査で彼がリードしていることもわかり、石原都知事は四選に立候補。自らの手で再度五輪招致を手掛けることになったのだったが、その立候補表明の日が、奇しくも11年3月11日。東日本大震災の日となった。

そして4月10日に四選を果たした石原氏の周辺には、当然大震災を受けて、オリンピック招致見直し論も湧き起こった。が、「復興五輪」を新たな目的に加えたうえで、石原氏は国政への復帰を目指して都知事を引退（後継者には副都知事を務めていた猪瀬直樹氏が当選）。

同年6月にはスポーツ振興法を改定したスポーツ基本法が公布され、8月より施行。プロ・スポーツや障害者スポーツの発展、スポーツ産業の育成が唱えられるなか、13年9月7日アルゼンチンのブエノスアイレスで行われたIOC総会で、東京はイスタ

ンブル、マドリードと争い、2020年の第32回夏季オリンピック大会、第16回夏季パラリンピック大会の開催都市に選ばれたのだった。

その後は、エンブレムの盗作疑惑問題、国立競技場建設問題、ボート・カヌー会場の東北地方への移転問題、そしてマラソンと競歩の札幌への移転問題等々、様々な問題が噴出した。が、当初のオリンピック招致の目的は、ほぼ順調に達成されてきたのだった。

スポーツ庁創設

スポーツ基本法にもその設置が望まれると書き入れられたスポーツ庁も、15年10月1日に創設された。18年4月には日本体育協会も日本スポーツ協会と名を変え、20年からは体育の日もスポーツの日に変更。国民体育大会も、23年の佐賀大会から国民スポーツ大会と名称を変え、「身体を鍛えるための教育的体育」が中心だった日本のスポーツ界は、「自発的に

仲間と楽しむスポーツ」へと中身も変化しようとはじめた。それによって、体罰、パワハラ、セクハラ等の「体育会系運動部」にありがちだった「軍隊的傾向」（国際NPO法人・ヒューマン・ライツ・ウォッチの指摘）をなくそうとする努力も始まっている。

そして体育教育が中心で、ビジネス化（産業化）が進まなかった点にも、メスが入られた。16年4月には日本政府によって『日本再興戦略2016―第4次産業革命に向けて』がまとめられ、スポーツ産業を成長産業と捉え、《約5・5兆円だったスポーツ市場の規模を20年までに10兆円、25年までに15兆円に拡大することを目指す》という国家目標も示されたのだった。（森高信『スポーツビジネス15兆円時代の到来』平凡社新書）

目的は『招致』でほぼ達成

現在の日本スポーツ産業は「約8・3兆円の規

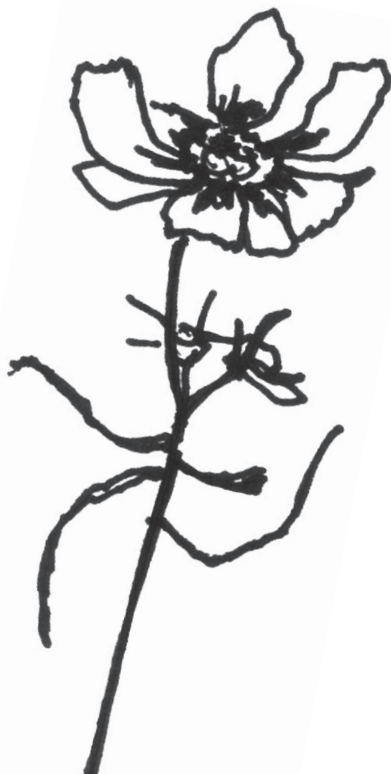
模」(スポーツ議員連盟・馳浩氏)まで伸びたらしい。目標額を下回っているのは新型コロナのせいもあるのだろう。が、来年の21年にオリンピック・パラリンピックを「開催」できるかどうかはともかく、「招致」することによる目的は、既にほぼ達成することができたと言っているだろう。以後、日本のスポーツ産業が、現在以上に、さらに成長できるかどうかは、他の産業の場合と同様、既得権益を握っている「老企業」の退陣もしくは機構改革にかかっていると言えるのではないだろうか。

さらなる発展と本体の仕事

プロ野球の球団数増加や高校野球の改革、関東の大学だけの箱根駅伝の全国化や女子の参加、UNIVAS(大学スポーツ協会)の発展拡大など、さらに大きなスポーツ市場を獲得できると思われるスポーツ産業の前には、マスメディア(新聞社)や名門大学が主催者として既得権益を握っているという日

本特有の問題が横たわっている。

しかし、とりあえず「2020」をきつかけに、日本のスポーツ界は、変化へのきつかけを掴むことができた。ならば、次のさらなる展開は、巨大メディアが、スポーツの主催者になるのではなく、本来の仕事であるスポーツ・ジャーナリズムを発揮できるかどうかにかかっているのではないだろうか？ そうすれば日本のスポーツ市場・スポーツ産業、そしてスポーツ文化は、さらに発展すると思われるのだが……。



夢劇場『馬』

No.21



遊園地のスリル

遊園地には苦い思い出がある。

10代の頃、ある東京郊外の遊園地で回転しながら上昇下降を繰り返すロケットに乗った。急上昇して足が頭の上に振りがつた時、あろうことかお腹の安全ベルトが音を立てて外れてしまった。だからその後、幾度となく脳天を天井で打った。やがて恐怖タイムは終わり、係員に「ベルトが外れましたっ！」と訴えると「中で暴れると外れますよ」と、こちらが悪いような言い方をされ、スリルを楽しむものには生涯乗らないと誓った。その後、何十年か経ち、としまえんに行ったとき『カルーセルエルドラド』という回転木馬に一目惚れした。

24体の木馬、一頭一頭に個性があり、天井にはアールデコ風に描かれた美女や天使が飛ぶように回る。素晴らしく優雅で、このまますーつとグルグル回っていたい……とまで思った。しかし、今夏、東京都練馬区のとしまえんは94年の歴史に幕を閉じた。いつもカルーセルエルドラドは同じ場所と同じようにずっと回っているものだと思っていたので、言葉にならないほど寂しかった。生活の中で、空気のように存在していたものが、次々と姿を消してゆく。タバコやマツチ、木造の家によく見られた縁台や縁側、タバコ屋さんの看板娘……。

コロナ禍で無観客開催が続く競馬はテレビで見ることができず、馬券も買える。でも競馬場で買う馬券は一味も二味も異なる気がする。歓声や罵声とともに馬券を握りしめ、馬の名前を叫ぶ日常……。人の匂い、馬の匂いに入り交じるカレライスの香り……。大人の遊園地。競馬場で味わうスリルも今はつくづく懐かしい。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011
埼玉県新座市野火止8-16-32
株式会社東美物流
『スポーツゴジラ』係

送料値上りのため45号より変更しました。

10冊まで 送料 400円

20冊まで 送料 700円

40冊まで 送料 1200円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の冬号第49号は2020年12月

中旬刊行を予定しています。ご期待ください。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記でお読みなれます。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫

●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館

●港区芝・東京都人権プラザ図書館

【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）

／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリンピック・アカデミー名誉会長）／佐久間昇二（ぴあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）／永井憲一（法政大学名誉教授）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（京都工芸大学院高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じでしたか？

『スポーツゴジラ』が置かれている都営地下鉄（大江戸線、浅草線、三田線、新宿線）では、ラジオのAM放送を聴くことが可能です。緊急時の情報収集などに役立ちます。

スポーツゴジラ®

2020年10月8日発行
第1巻第48号

無断転載を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・川本凜太郎・阿部雄輔

波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

平塚貴大・山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 図書印刷株式会社

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401